

学生・職員と創る大学教育 —FD・SDの新発想—

【企画者】 清水 亮(三重中京大学)

【司会者】 清水 亮(三重中京大学)

【報告者】 橋本 勝(富山大学)

山地弘起(長崎大学)

1. はじめに：企画趣旨

2008年4月にFDが義務化され、2011年度からはキャリア教育の導入が大学に求められている。グローバル化とユニバーサル化に揺れる大学が期待に応えるには、従来の「学生が何を学んだか」に焦点をおく教育から「学生は何ができるようになったか」を重視する大学教育にシフトすることが不可欠である。そのためには、大学の教育を見直し、変えていくことが必要である。つまり、日本の大学は、『中央公論』2011年2月号で立花隆氏が主張されているように「大学再生には、今一度の『一九四五年』体験！」が迫られている。ただ、教員の努力だけで今大学に求められている教育の変革を実のあるものにするには限界がある。では実現のためにはさらに何が必要なのか。それは大学コミュニティの構成者である「学びの主権者」である学生とその学びを支える職員の存在であり、彼らの潜在能力の引き出しである。このラウンドテーブルでは、大学コミュニティを巻き込んだ新たな試みの今とこれからの可能性について、またFDの新発想としての「学生・職員と創る大学教育」の今、そしてこれからのについてフロアの皆さんと考えてみた。

2. 中教審答申と学生主体型授業への注目

FDを狭義に教員の授業改善とだけ捉えていては、中央教育審議会(中教審)の答申の達成は、ほぼ不可能である。学士課程教育の構築に向けて、「学びの主権者」たる学生、そして大学という協同体の重要な要素である職員を含めた

FDを展開していくことが不可欠である。4年間という年限で、学生に各々の大学が育成を目指す人材像と学士力を達成させるには、入学後早い時期に自主的な学びへの誘いと目標達成への自信の醸成が必要である。時代が大学教育に要求する力としての学士力の達成はもちろんのこと、次世代を担う学生が学びたいことを学ばせることも大学の使命であり、国立大学の23大学(28.4%)の学長が「全学的な教育改革を進めるうえでの問題」と指摘している。「学生の主張が強い」ことを教育改革推進の向かい風としてではなく、追い風にする知恵が求められている。

そのためにはここ数年、岡山大学、山形大学、立命館大学、同志社大学を始めとする全国の国公私立大学で注目を浴び、学生の主体的な学びの伸長に成果を上げている学生参画型FD、PBL授業を導入し、学生・職員と大学教育・学士力を創るFDを展開していくことで、一つの活路が見出されるのではないだろうか。

同志社大学は、プロジェクト科目を、2006年から開講し、テーマの公募制と往還型地域連携モデルの構築を軸に推進してきた。このプロジェクト科目のもう一つの特徴は、全学共通教養教育科目に設置されている数少ないPBLの試みであることだった。テストやレポートの成績による成果重視の従来の教育手法とは異なり、同志社大学のPBLは、学生主体の社会連携型のチームPBLで、「学習者がプロジェクトに自発的、自律的にチームで取り組んでいくことによって、自分自身のものの見方や考え方を振り返

り、それを通して、いままで見えなかった自己を発見していくことを目指している」というプロセスを重視する教育を実現するものである。この PBL 科目を学生にとってより実りあるものにするために、さまざまな工夫がなされている。

プロジェクト学習は、「学習者自身が設定した現代社会の課題を地域・社会と連携しながら解決を目指していくために、学習状況が流動的であり、時々刻々の変化に対応しながらテーマの再構築を繰り返して、最終的な解決策にまで至る必要がある。いわば教科書のない学習であり、答えが準備されていない学びである。」その意味で、プロジェクト学習は日々FD であり、学習環境とそれを取り巻く教育環境を改善していく姿勢と条件を内在している。

小田隆治・杉原真晃編著『学生主体型授業の冒険：自ら学び、考える大学生を育む』（ナカニシヤ出版、2010）で、小田は、「われわれは学問を教えることこそが大学の根幹であることを信じて疑わないし、伝統的な講義スタイルの存在意義を認めている。」としながら「大学の大量化が急速に進行する時代の転換点である現代においても、時代に対応する（迎合するというここでは決してない）授業法が模索されてしかるべきである。」と指摘している。そして学生主体型授業への崇高な思いを「学生主体型授業は、全入時代に伴う学生の学力低下や意欲の減退への対症療法だけの役割を担っているのではない。ましてや精力的な職業人を求める財界からの要請に応えるためだけのものでもない。もっと積極的な意義として、より良い未来を創り出す批判力と創造力、行動力を伴った人間を育成するための挑戦であり冒険である。」とまとめている。

3. 「ためしてガッテン」流：「こうしたらできる、学生・職員と創る大学教育」

このラウンドテーブルでは、FD=フロッピー・ディスクというのが一般的だった頃からFDに取り組み、最近、新天地で新たに大学全体の

FDの推進に着手された二人の論者に苦労話も交えて話題提供していただき、どうしたら学生・職員と大学教育改革をゼロからスタート・推進できるのかについて、フロアの皆さんと共に考えた。

まず、岡山大学のFDを今後リードしていただくという大方の予想を覆し、突如2011年4月に富山大学に着任した橋本勝氏に、富山大学で何からどのように着手しようとしているのかについてお話しいただいた。岡山大学の学生・教職員教育改善専門委員会のような仕組みが全くない土壌にどのように種を蒔くのか。サークル的な立命館流の学生FDスタッフの募集から始めるという噂もあるが真偽の程はどうか。一線を画してきたはずの立命館型を単純に模倣するとは思えないが果たして秘策はあるのか。始めたいけれど何から？と戸惑いながら頑張っている他大学の教職員へのヒントをいただけたのではないだろうか。

続いて、メディア教育開発センターが全国大学共同利用機関としてFD推進に気を吐いていた頃、その中心にあり、その後、イギリス留学を経て、長崎大学に着任した山地弘起氏に、長崎でどのようなFDをリードしていこうとしているかを話していただいた。本学会をまたいで4日半、長崎大学で開催されたFD・SDサマータワーワークショップの企画の狙いや今後の展望などもお話しいただいた。同企画は教員（専任・新任・非常勤）、職員を巻き込む壮大なもので、元東京大学の佐藤良明氏による『これが東大の授業ですか。』に見られる英語統一教材作りに教員・職員・TAを巻き込んだFDを髣髴とさせた。

両氏の話提供を皮切りに、フロアの皆さんと共に、「こうしたらできる、学生・職員と創る大学教育」のヒントを考えた。これは使えろと「ガッテン」していただいてヒントを持ち帰り、活用していただけていたら、うれしい限りである。